



◇産業風土記◇

八代のいちご

春の味覚の代表的なものに「いちご」がある。真赤に熟れたいちごは、子供たちの大好物だ。八代地区が主産地で、県全体で七〇ヘクタール、生産量一、四〇〇トンのうち、四〇ヘクタール、八〇〇トンの生産を上げて、約六〇%を占めている。八代地区では従来から、米とスイカが主産物であったが、気候、砂壌質土壌がいちご栽培に合うという事で、二十五年頃から、いちご栽培が本格的に行なわれるようになった。いちごづくりも、五月から育苗に入り、十月に定植、十二月から五月中旬までが収穫期だから、一年かかりの仕事だ。なかでも、育苗期の灌水、うどんこ病などの防除、保温などが収量を左右するといふ。

四十七年に、一度共販体制が確立されたが、鮮度を保つため、現在はほとんどが自家用車で個人出荷。出荷先は、熊本市など地元かほとんど、県外は、鹿児島・福岡・長崎・大分へ出荷されている。

◀色つやや粒の揃ったいちごはポリバックにつめて、パッケージへ…いたみやすいので取り扱いには気をつかう。



▲ショッピングセンターで…もでぎたてのいちごはなかなかの評判だ。

◀赤く熟れたいちごがいっぱい。ビニールハウスのなかでぼぼと。



▼見事ないちごハウスの隊列。



やさしかったお父さん

高島明美(小学五年)

私のお父さんは、きれいでやさしくて、とってもいい人でした。わたしの小さい時、毎日たんしゃに乗って金沢へ働きに行っていました。夕方、お父さんが帰ってきますとわたしは、すぐお父さんのひざに入っていたことをおぼえています。

ある日、おみせ屋さんに電話がかかり、「お父さんが交通事故にあった」ということで、そのとき、お母さんが山へ行っていました。お兄さんが走って知らせに行きました。お母さんは、走ってきてすぐ病院に行きましたが、お父さんはお母さんに会えないで、苦しんで死んで行ったそうです。

次の朝、家でそうしきをしました。その時、わたしは一年生で、お兄さんは四年生。大きいお姉さんは高校二年生、小さいお姉さんは中学三年生でした。わたしは、何にもわかりませんでした。けれど、お父さんのそばで、お母さんのないているのが、かわいそうになりませんでした。

夕方になってもお父さんはかえって来ません。だんだんさびしくなってきました。お友だちがお父さんといっしょにいるのを見ると、うらやましくなりません。お父さんが死ななければよかったのと思います。

お父さんをひいた人がにくらしくてたまりません。秋にはいねかり、いねかけを、私とお母さんとお兄さんの三人で夕方おそくまでします。お母さんや、おばあさんがかわいそうです。これから自動車をうんでんしている人は、人をひかないように気をつけて下さい。こんなかなしいことは、いやです。

(注) 交通遺児作文集「天国にいるおとうさま」から。

